

令和2年度 野生鳥獣の生息状況等アンケート調査

集計結果概要

1. アンケート調査の目的と回収状況

(1) 目的

本事業は、農業集落ごとの野生鳥獣の生息状況や農業被害等を把握し、捕獲や防除対策等の資料とすることを目的とする。

(2) 調査対象者、調査方法及び対象動物

ア 調査対象者

調査対象者は、県自然保護課において各市町村から提供された行政区長や農業委員等（以下農業精通者という。）名簿に基づき決定した。なお、名簿の提供が困難である場合には県が実施する指定管理鳥獣捕獲等事業の従事者の一部を対象とした。

イ 調査方法

調査票によるアンケート調査（郵送法）

ウ 対象動物

- ・イノシシ
- ・ニホンジカ
- ・ツキノワグマ
- ・カモシカ

(3) 配布及び回収数

発送した調査票は合計 1,542 通であり、回収した調査票は 1,147 通、集落名または行政区名が確認できた調査票は 1,144 通で、有効回答率は 74.2%であった。

地区が特定できた回答の位置図を図 1 に示す。

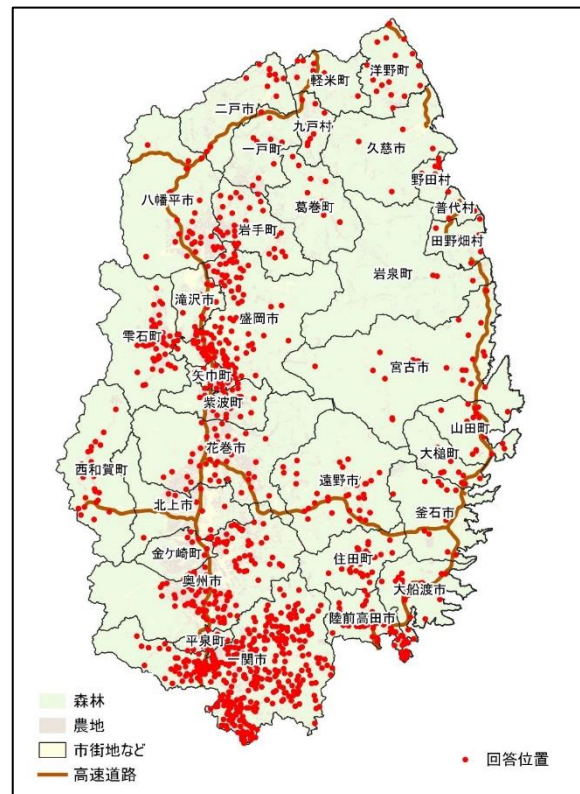


図 1 回答の位置図

2. 集落の状況について

(1) 集落の農家戸数

集落の農家戸数についての回答を図2に示す。
回答は「10戸未満」、「10戸以上30戸未満」、「30戸以上」の3つからの選択形式とした。

集落の農家戸数は「30戸以上」が最も多く(57%)、次いで「10戸以上30戸未満」(35%)の順であった。

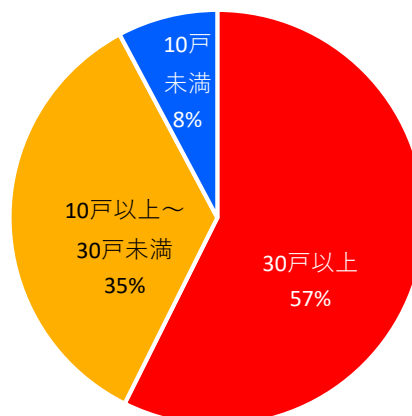


図2 集落の農家戸数

(2) 寄合などの頻度

寄合の実施回数についての回答を図3に示す。

回答は年間の寄合回数を数字で記入し、年間「1回以上5回未満」、「5回以上10回未満」、「10回以上15回未満」、「15回以上」の4段階に分けて集計した。

寄合の頻度は「年間1回以上5回未満」が最も多く(51%)、次いで「5回以上10回未満」(29%)の順であった。

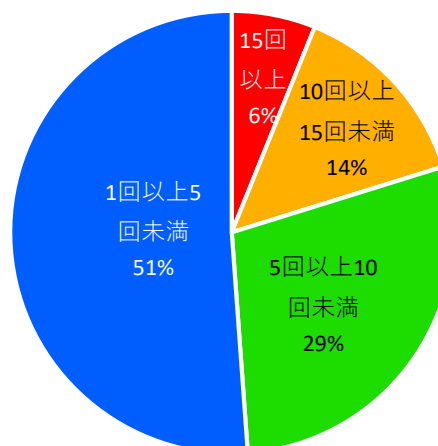


図3 寄合などの頻度

(3) 集落で行っている共同活動

集落で行っている共同活動についての回答を図4に示す。

集落で行っている共同活動は「道路の草刈り」が最も多く(87.4%)、次いで「集会所やお宮の草刈、掃除」(74.6%)の順であった。また、「研修会や勉強会」は34.1%であった。

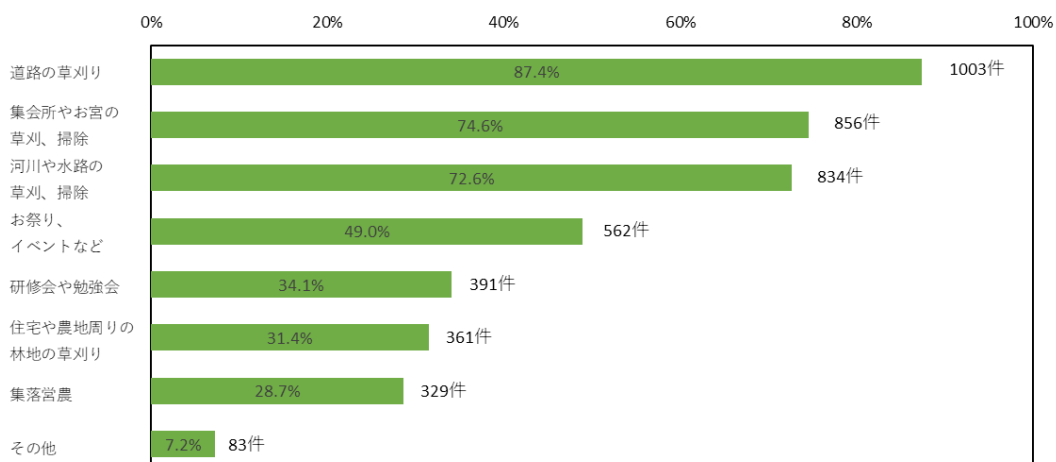


図4 集落で行っている共同活動

3. イノシシについて

(1) 生息状況

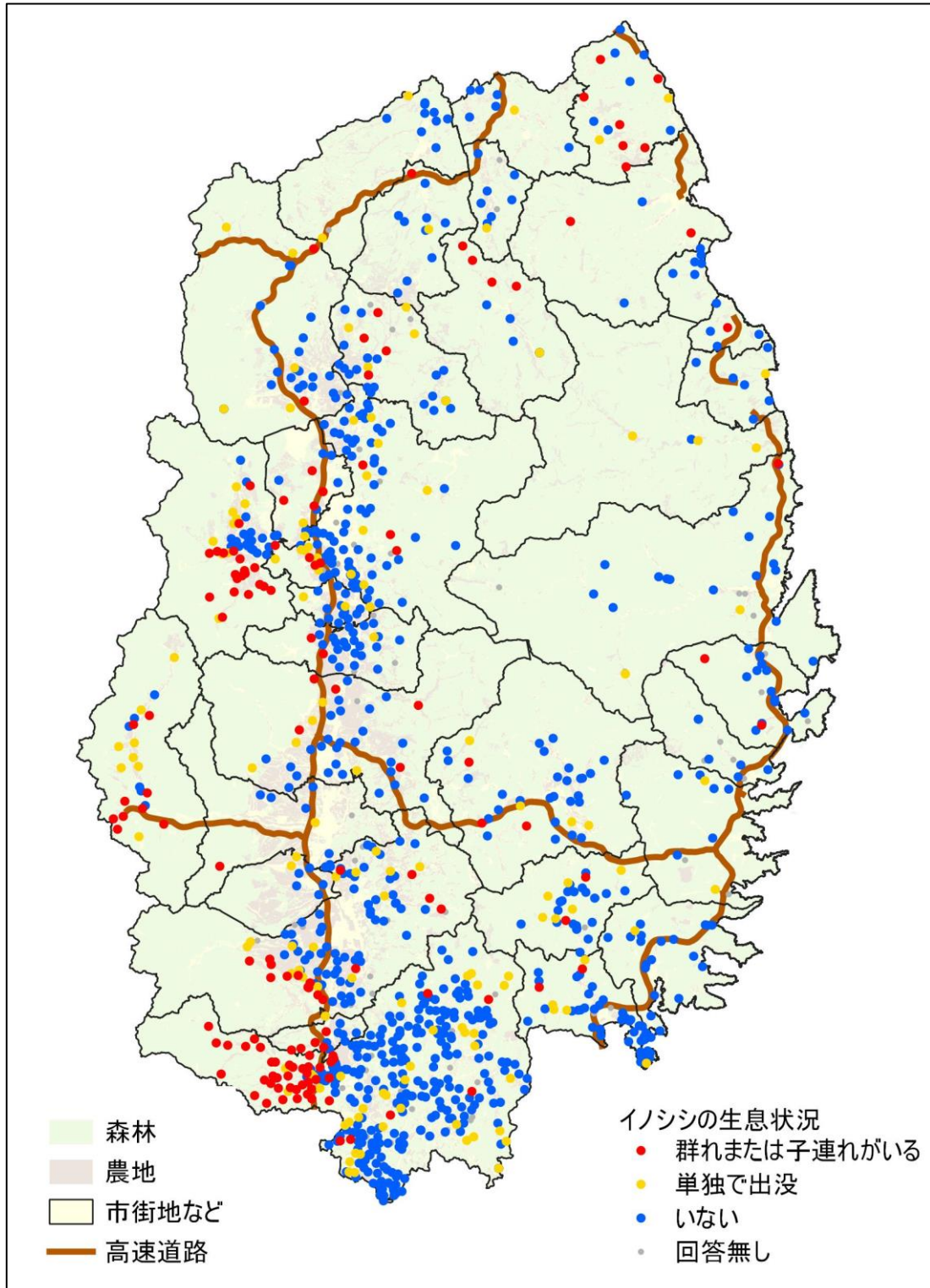


図 3-1 イノシシの生息状況

全体の回答数

回答件数：1065件（957件）

回答	件数	割合
群れまたは子連れがいる	145件（115件）	13.6%（12.0%）
単独で出沒	146件（129件）	13.7%（13.5%）
いない	774件（713件）	72.7%（74.5%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

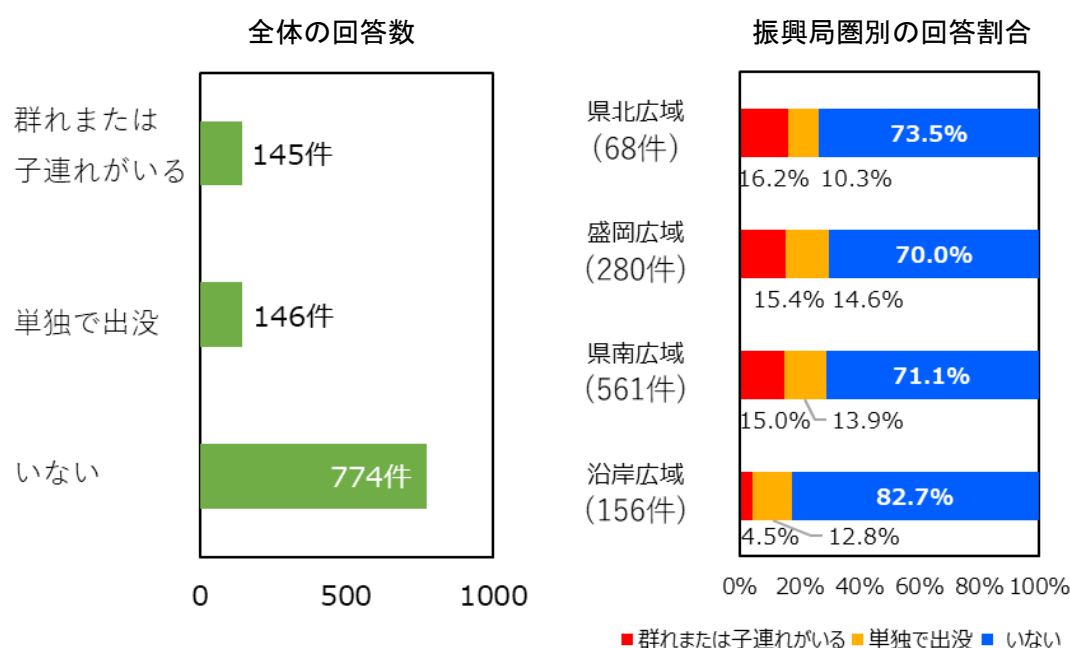


図 3-2 イノシシの生息状況の回答件数

イノシシの生息状況についての回答（回答数 1,065 件）を図 3-1、図 3-2 に示す。

回答は、「群れまたは子連れがいる」、「単独で出沒」、「いない」の 3 段階とした。

県全体では「群れまたは子連れがいる」と「単独で出沒」の回答を合わせた割合は 27.3%、「いない」の回答は 72.7%となっている。また、東北自動車道の西側において「群れまたは子連れがいる」との回答が多く見られ、これらの地域はイノシシが定着している可能性が高い。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合は同様の傾向となっている。

圏域別に見ると、沿岸広域圏を除く 3 つの圏域で「群れまたは子連れがいる」が 15～16%で同水準となっている。

(2) 出没の増減

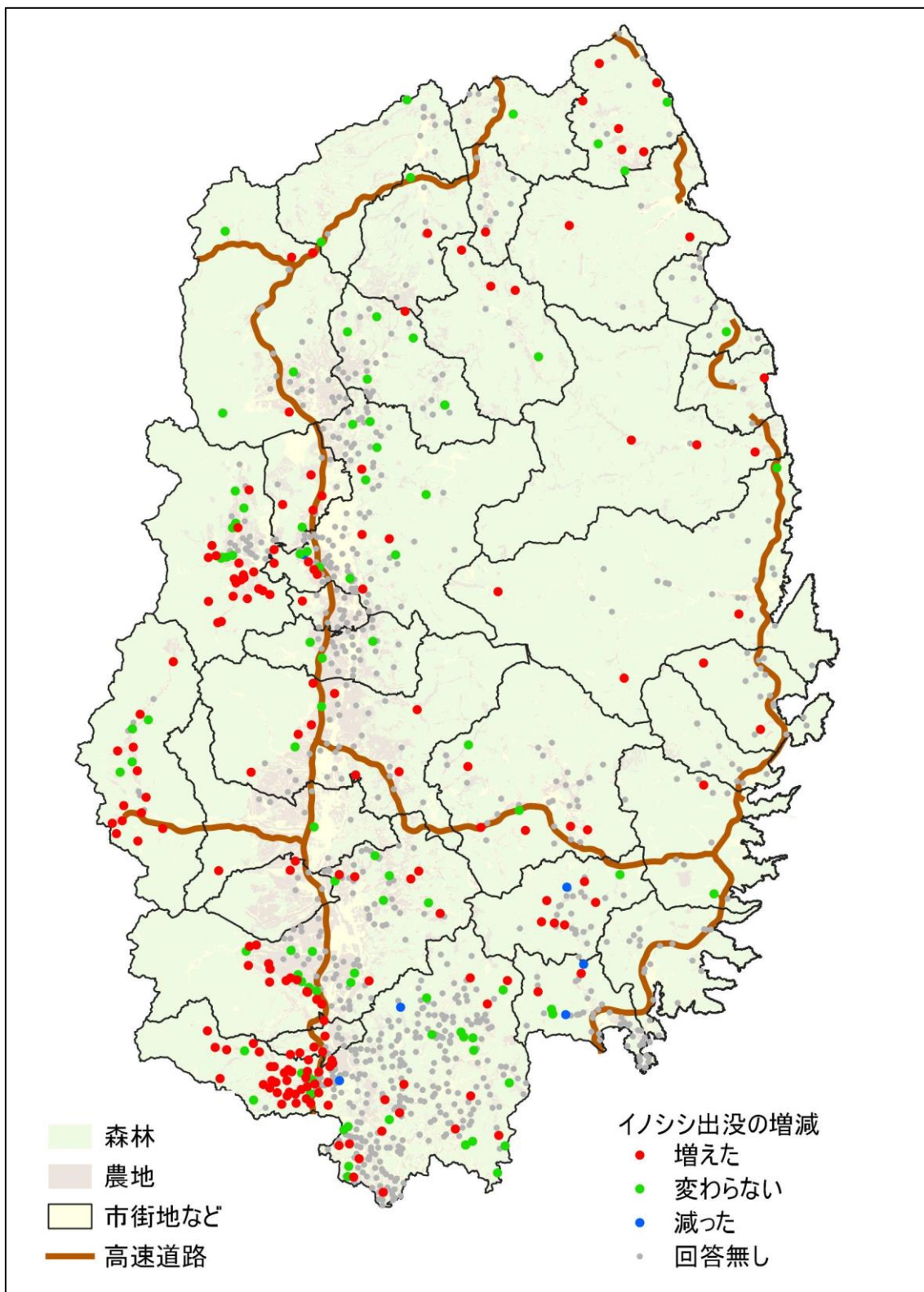


図 3-3 イノシシの出没の増減

全体の回答数

回答件数：275件（243件）

回答	件数	割合
増えた	175件（175件）	63.6%（72.0%）
変わらない	93件（67件）	33.8%（27.6%）
減った	7件（1件）	2.5%（0.4%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

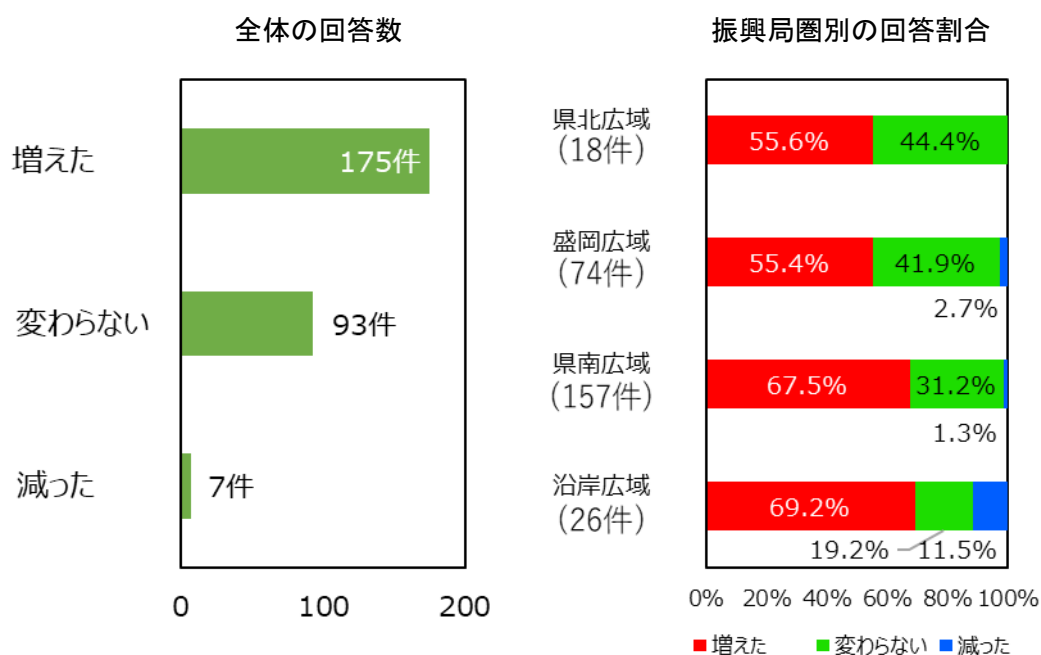


図 3-4 イノシシの出没の増減の回答件数

前年度と比較したイノシシの出没の増減についての回答（回答数 275 件）を図 3-3、図 3-4 に示す。

回答は、「増えた」、「変わらない」、「減った」の3段階とした。

県全体では頭数が「増えた」との回答が最も多く（63.6%）、圏域別に見ても全ての圏域で「増えた」が5割を超えている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

※「(2)出没の増減」以降の調査は「(1)生息状況」の回答項目で「いない」以外の回答を対象として集計したものである。

(3) 農業被害

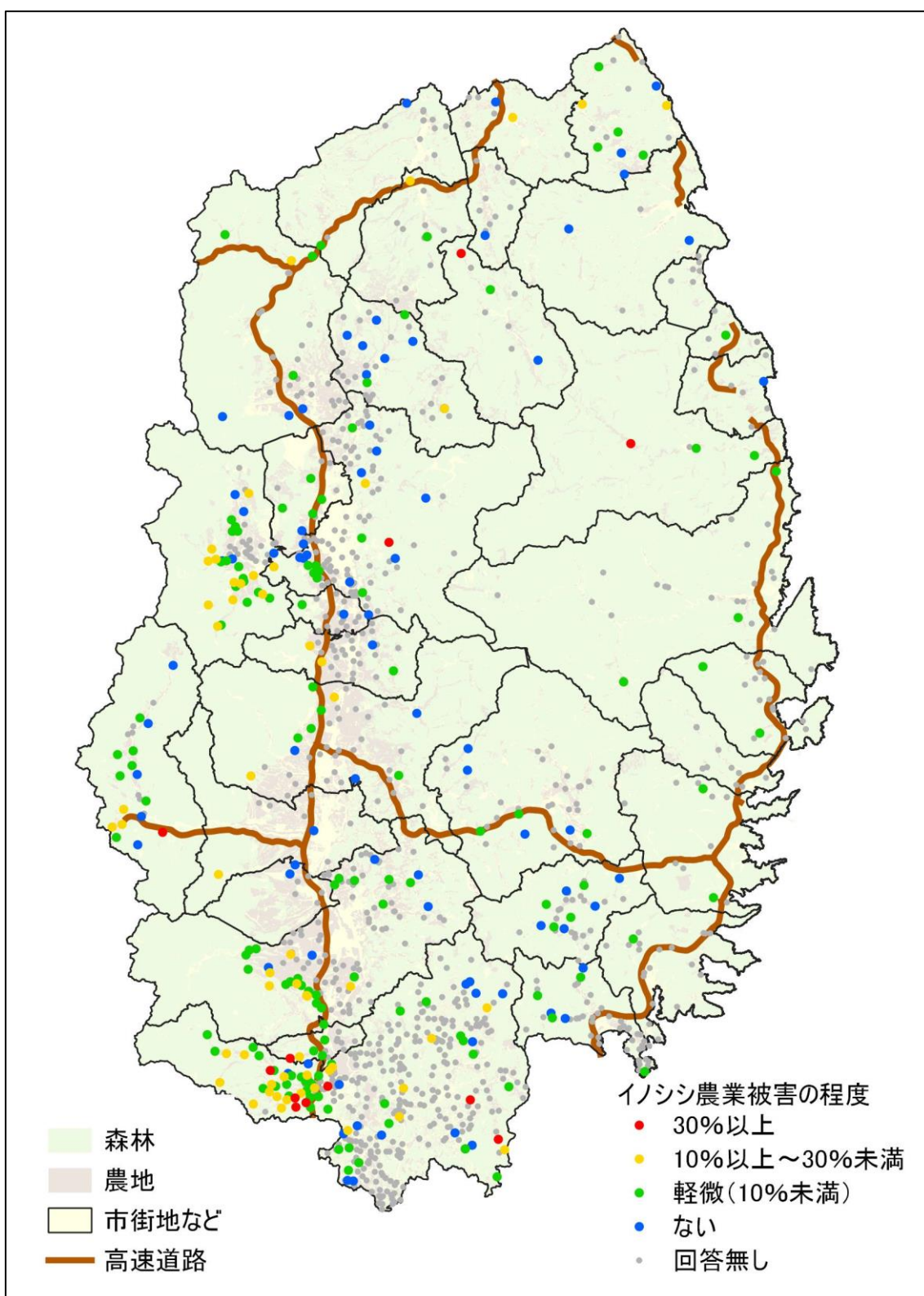


図 3-5 イノシシによる農業被害

全体の回答数

回答件数：285件（292件）

回答	件数	割合
30%以上	12件（23件）	4.2%（7.9%）
10%以上～30%未満	56件（51件）	19.6%（17.5%）
軽微	133件（116件）	46.7%（39.7%）
ない	84件（102件）	29.5%（34.9%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

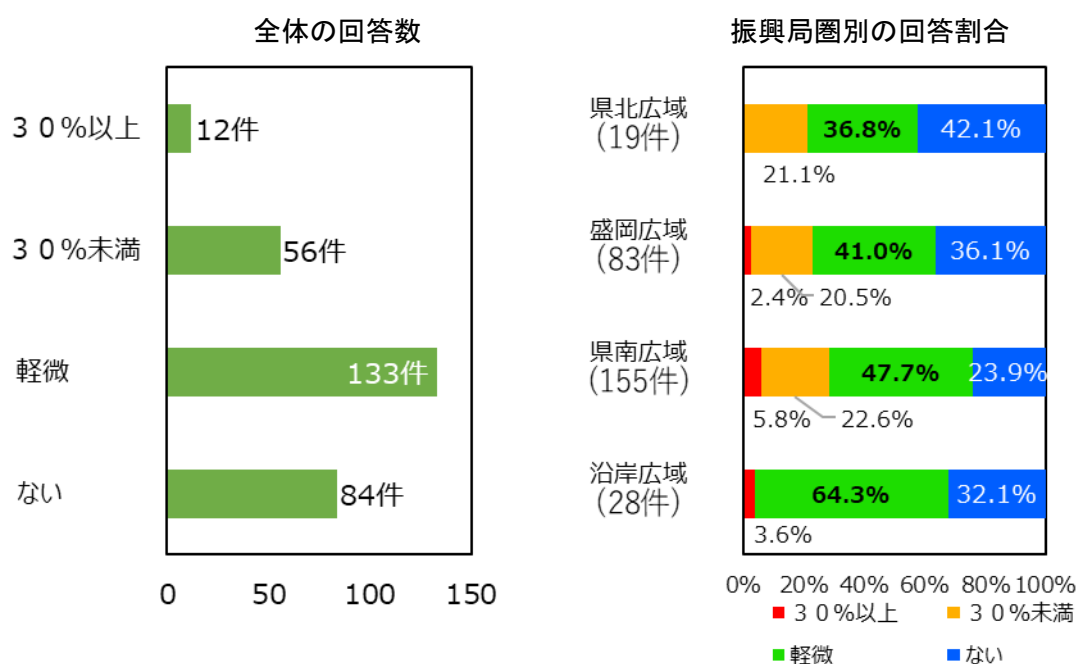


図 3-6 イノシシの農業被害の程度の回答件数

イノシシの農業被害の程度についての回答（回答数 285 件）を図 3-5、図 3-6 に示す。

回答は農作物の本来の生産量を 100%として「30%以上」、「10%以上～30%未満」、「軽微（10%未満）」、「ない」の 4 段階とした。

県全体では被害の程度について「軽微」の回答が多く（46.7%）、次いで「ない」（29.5%）となっているが、「30%以上」と「10%以上～30%未満」の回答を合わせると全体の 2 割以上となっている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別の被害の程度について「30%以上」と「10%以上～30%未満」の回答を合わせた割合は県南・盛岡・県北広域圏で 2 割を超えていた。

(4) 取り組んでいる防除対策と効果

取り組んでいる防除対策とその効果について図 3-7 に示す。複数の組み合わせで行っている場合も合わせて集計した。

単独の防除対策は「防護柵」(79 件) との回答が最も多く、次いで「やぶ刈払い」(68 件)、「捕獲」(65 件) の順となっている。

対策の効果については「防護柵」を「効果あり」とした回答の割合が最も高く(58%)、次いで「捕獲」(29%)となっている。

複数の防除対策の組み合わせとしては、「防護柵+捕獲」(38 件)が多く行われており、組み合わせ対策の中では「効果あり」の割合が最も高い。

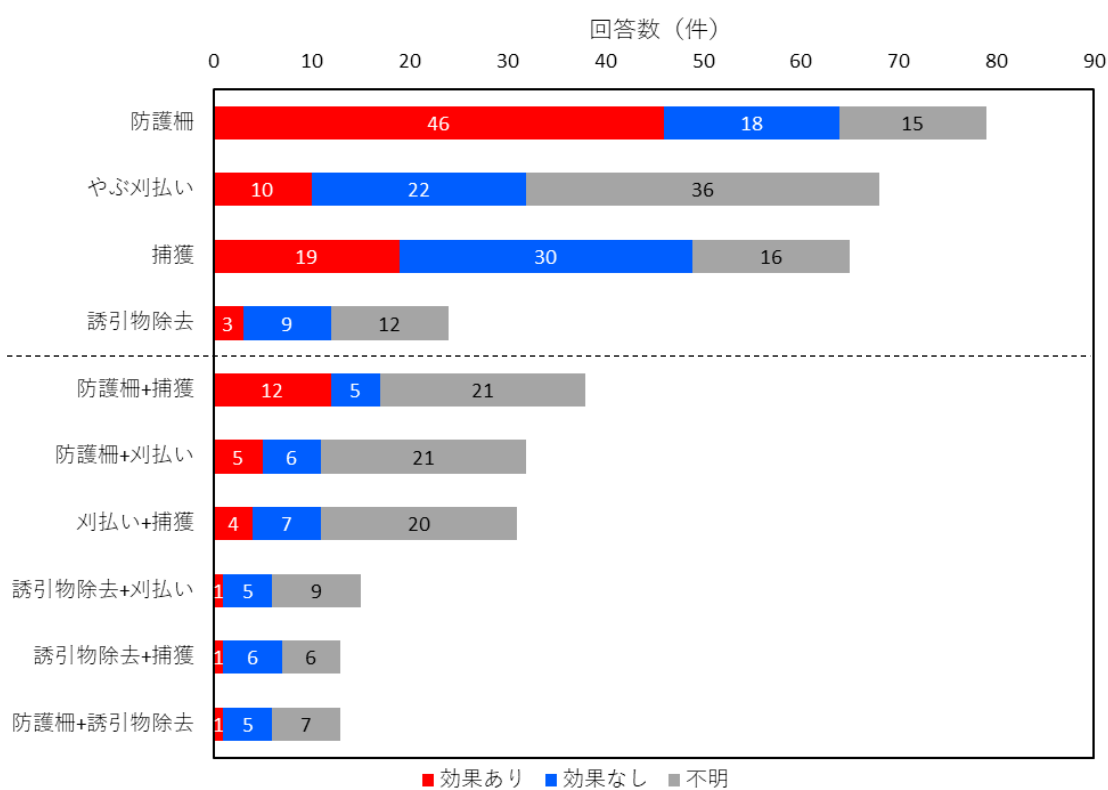


図 3-7 取り組んでいる防除対策と効果

4. ニホンジカについて

(1) 生息状況

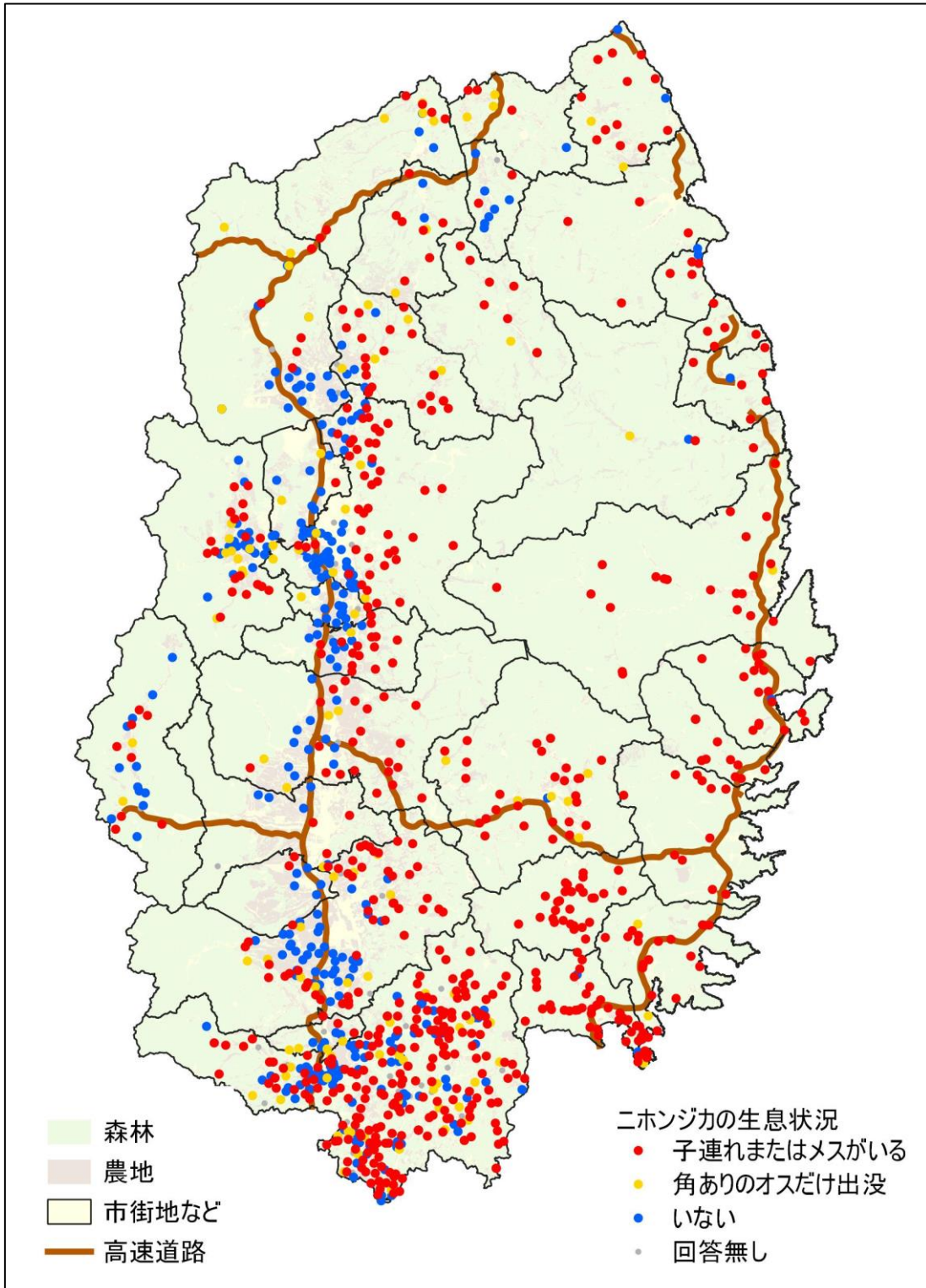


図 4-1 ニホンジカの生息状況

全体の回答数

回答件数：1099件（1011件）

回答	件数	割合
子連れまたはメスがいる	656件（601件）	59.7%（59.4%）
角ありのオスだけ出沒	114件（131件）	10.4%（13.0%）
いない	329件（279件）	29.9%（27.6%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

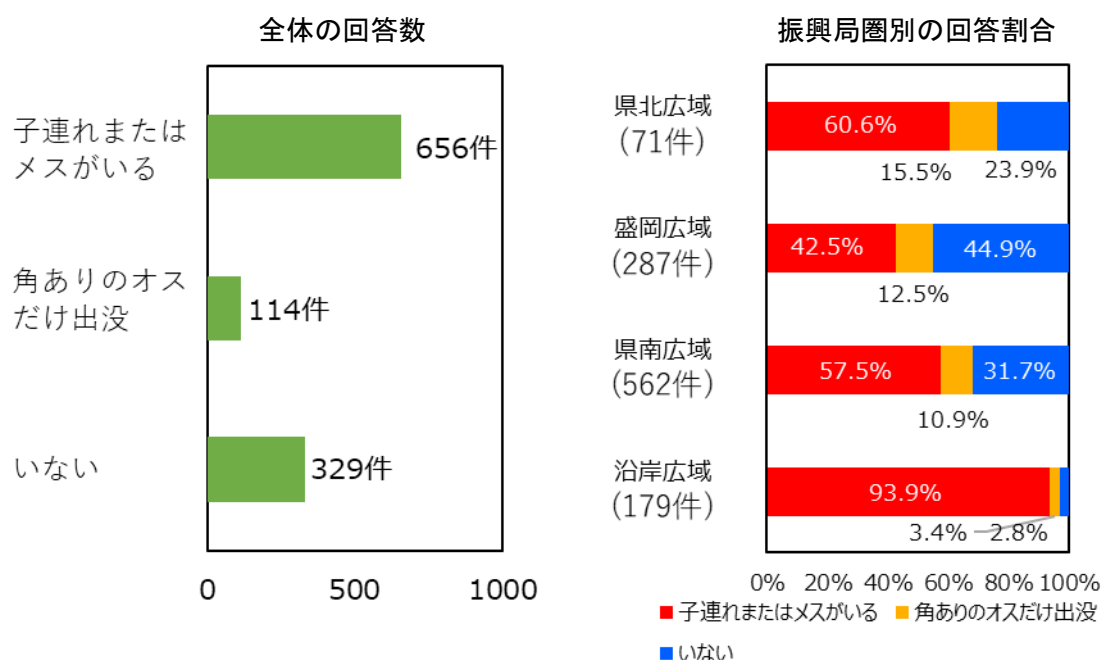


図 4-2 ニホンジカの生息状況の回答件数

ニホンジカの生息状況についての回答（回答数 1,099 件）を図 4-1、図 4-2 に示す。

回答は、「子連れまたはメスがいる」、「角ありのオスだけ出沒」、「いない」の3段階とした。県全体では「子連れまたはメスがいる」の回答が多く（59.7%）、次いで「いない」（29.9%）の順になっている。「子連れまたはメスがいる」と「角ありのオスだけいる」の回答を合わせると、全体の7割以上となり、地図からも分かるように広域で生息が確認されている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別に見ると、沿岸広域圏では「子連れまたはメスがいる」の割合が 93.9% を占めている。また、「子連れまたはメスがいる」の割合が最も少ない盛岡広域圏でも 4 割を超えている。

(2) 出没の増減

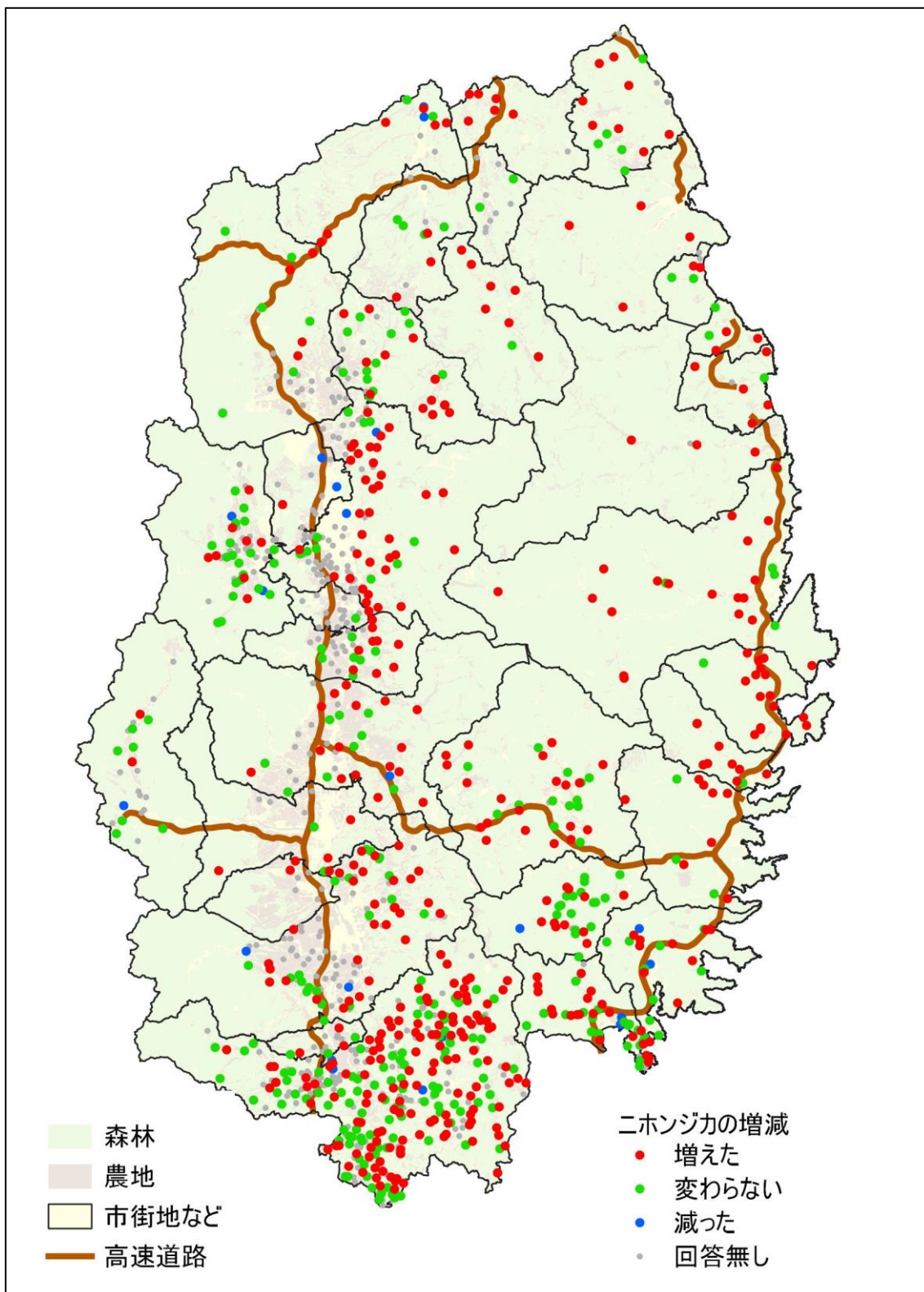


図 4-3 ニホンジカの頭数の増減

全体の回答数

回答件数：751件（760件）

回答	件数	割合
増えた	432件（445件）	57.5%（58.6%）
変わらない	297件（290件）	39.5%（38.2%）
減った	22件（25件）	2.9%（3.3%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

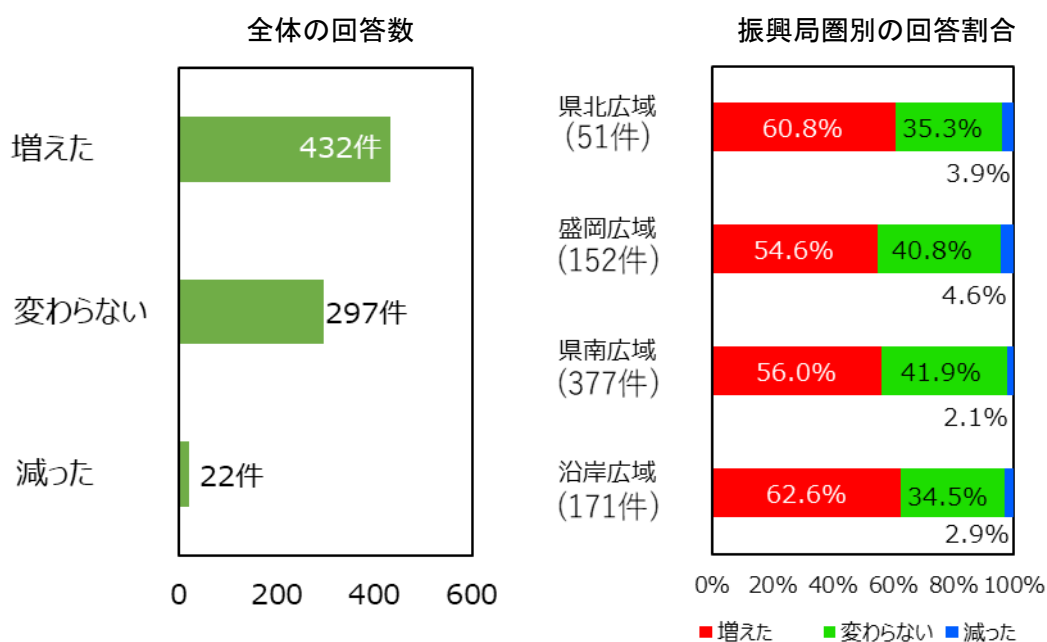


図 4-4 ニホンジカの出没の増減の回答件数

前年度と比較したニホンジカの出没の増減についての回答（回答数 751 件）を図 4-3、図 4-4 に示す。

回答は、「増えた」、「変わらない」、「減った」の3段階とした。

県全体では頭数が「増えた」との回答が最も多く（57.5%）、令和元年度調査結果と比較すると大きな変化はなかった。

圏域別に見ても全ての圏域で「増えた」が5割を超えている。

※「(2)出没の増減」以降の調査は「(1)生息状況」の回答項目で「いない」以外の回答を対象として集計したものである。

(3) 農業被害

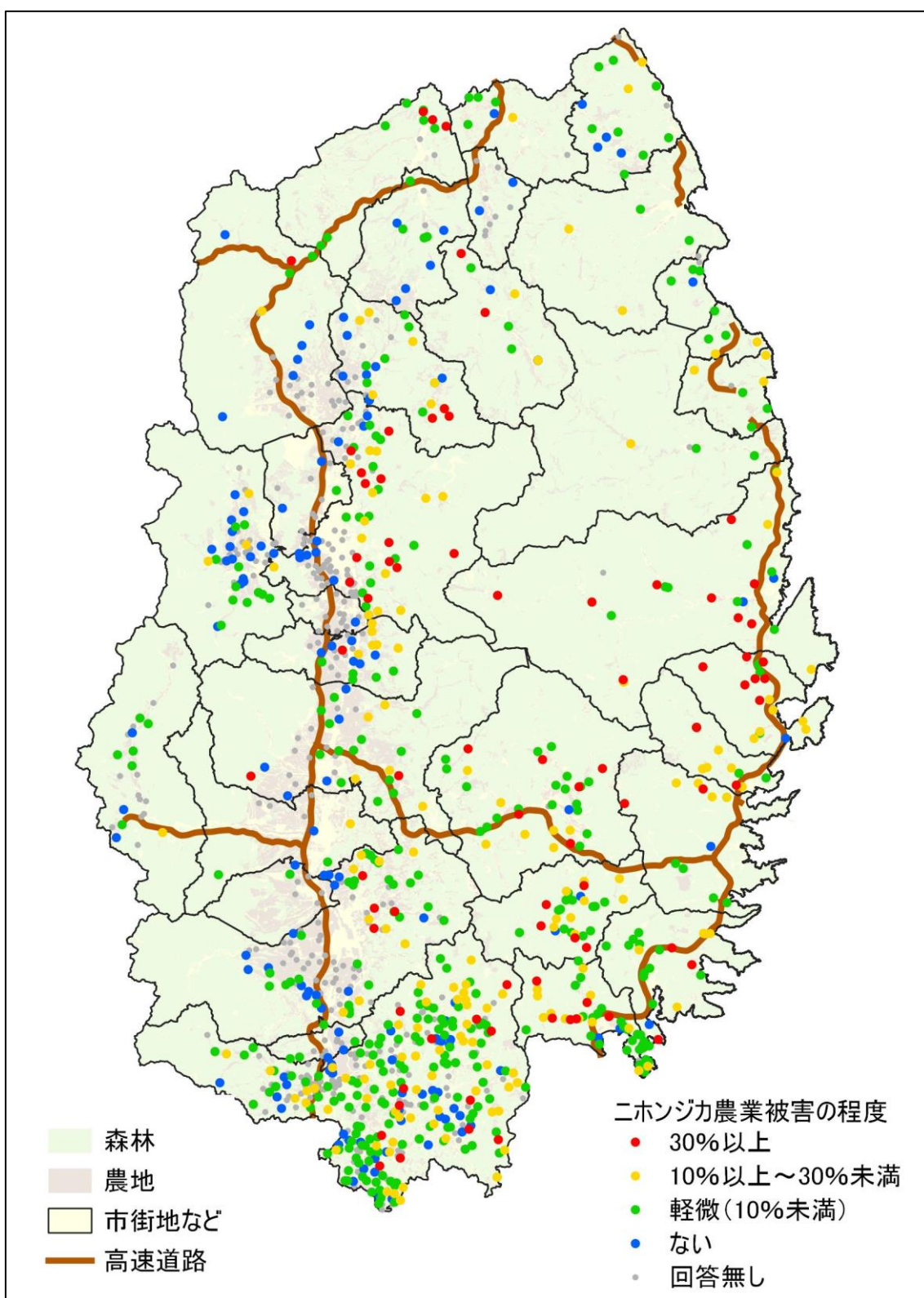


図 4-5 ニホンジカによる農業の程度

全体の回答数

回答件数：761件（789件）

回答	件数	割合
30%以上	84件（72件）	11.0%（9.1%）
10%以上～30%未満	174件（141件）	22.9%（17.9%）
軽微	353件（378件）	46.4%（47.9%）
ない	150件（198件）	19.7%（25.1%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

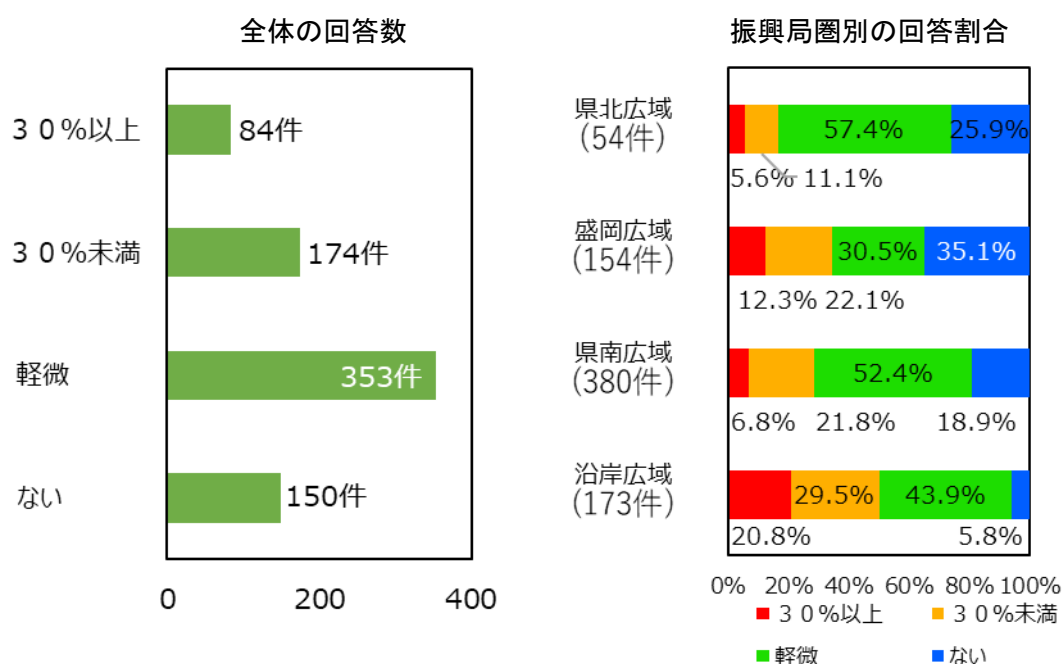


図 4-6 ニホンジカによる農業被害の程度の回答件数

ニホンジカの農業被害の程度についての回答（回答数 761 件）を図 4-5、図 4-6 に示す。

回答は農作物の本来の生産量を 100%として「30%以上」、「10%以上～30%未満」、「軽微（10%未満）」、「ない」の4段階とした。

県全体では被害の程度について「軽微」の回答が多く（46.4%）、次いで「10%以上～30%未満」（22.9%）の順となっている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別の被害の程度について「30%以上」と「10%以上～30%未満」の回答を合わせた割合は沿岸広域圏で5割を超えていた。

(4) 取り組んでいる防除対策と効果

取り組んでいる防除対策とその効果について図 4-7 に示す。複数の組み合わせで行っている場合も合わせて集計した。

単独の防除対策は「防護柵」(356 件) との回答が最も多く、次いで「やぶ刈払い」(179 件)、「捕獲」(144 件) の順となっている。

対策の効果については「防護柵」を「効果あり」とした回答の割合が 68% と最も高く、次いで「捕獲」(42%) となっている。

複数の防除対策の組み合わせとしては、「防護柵+刈払い」(120 件) が多く行われており、「効果あり」の割合が最も高いのは「防護柵+捕獲」で 4 割だった。

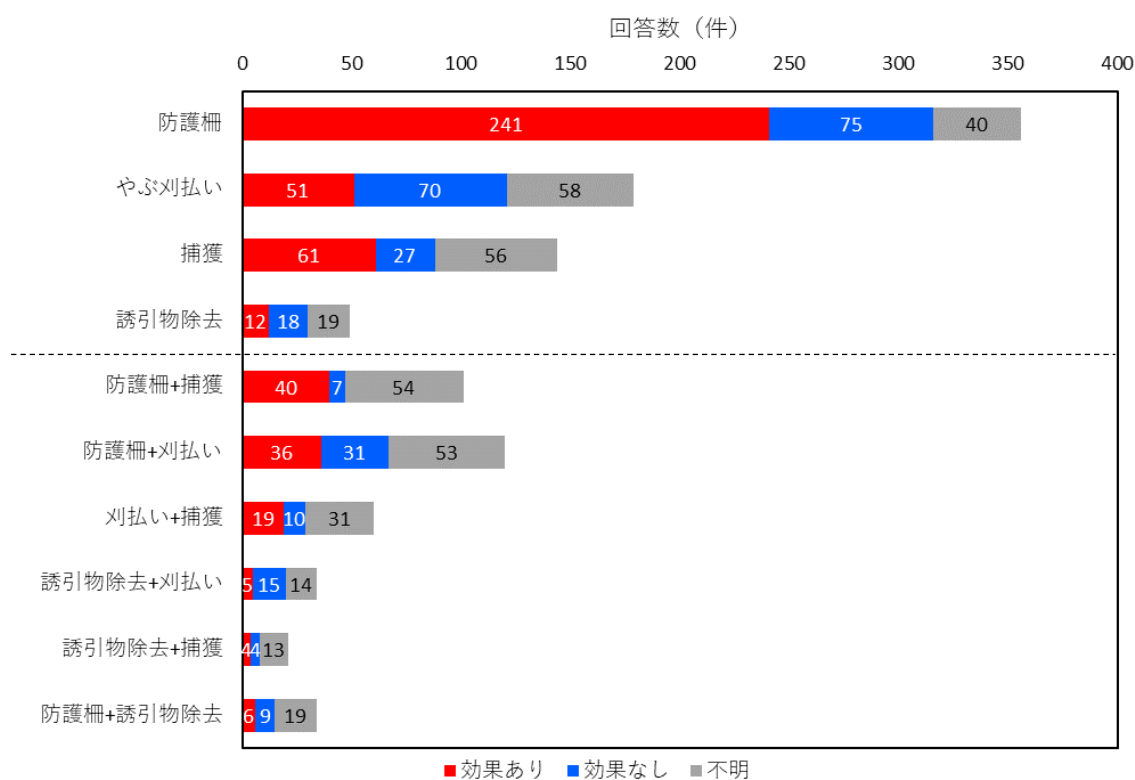


図 4-7 実施している防除対策とその効果

5. ツキノワグマについて

(1) 生息状況

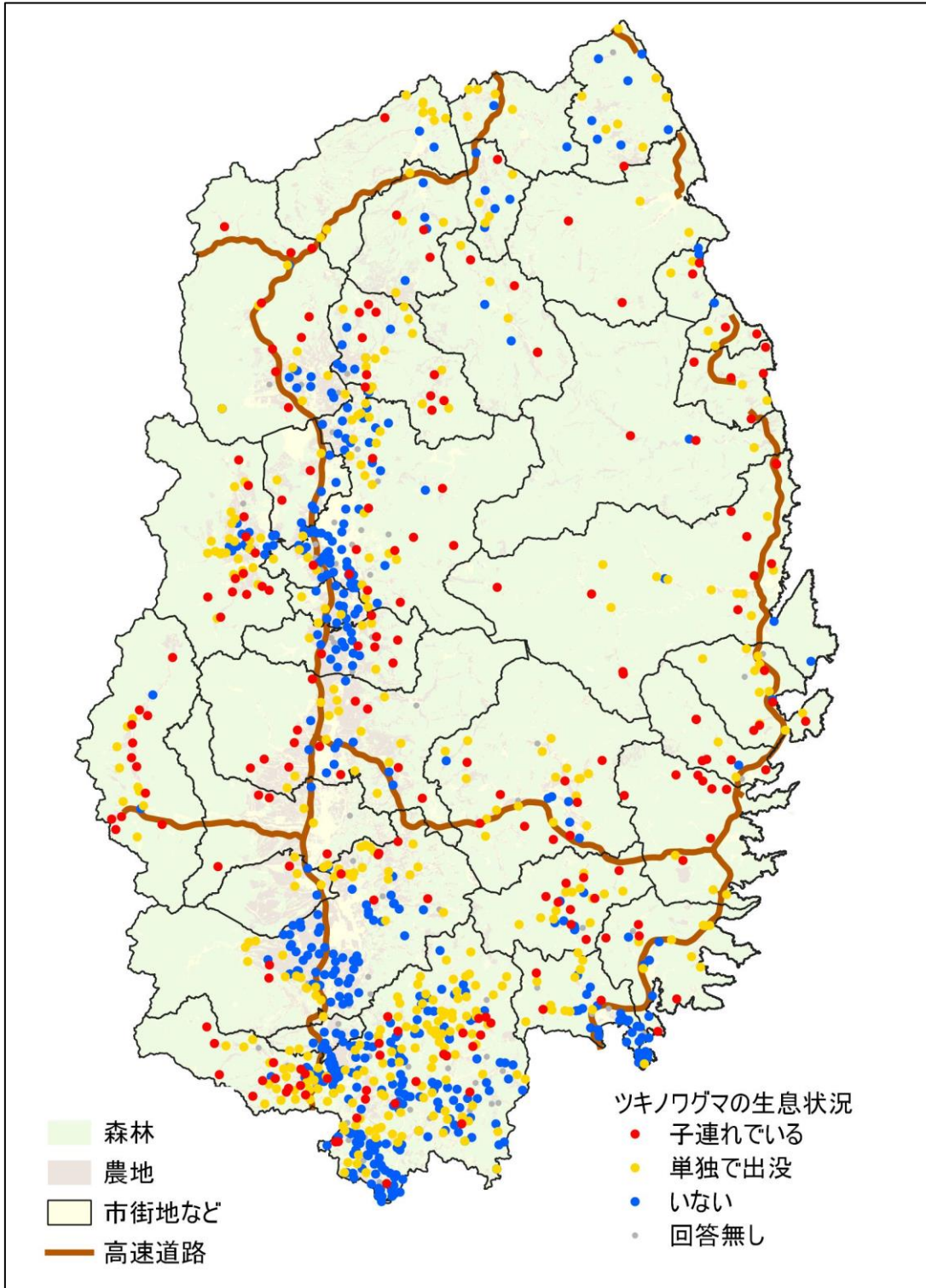


図 5-1 ツキノワグマの生息状況

全体の回答数

回答件数：1071件（991件）

回答	件数	割合
子連れでいる	210件（256件）	19.6%（25.8%）
単独で出沒	404件（372件）	37.7%（37.5%）
いない	457件（363件）	42.7%（36.6%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

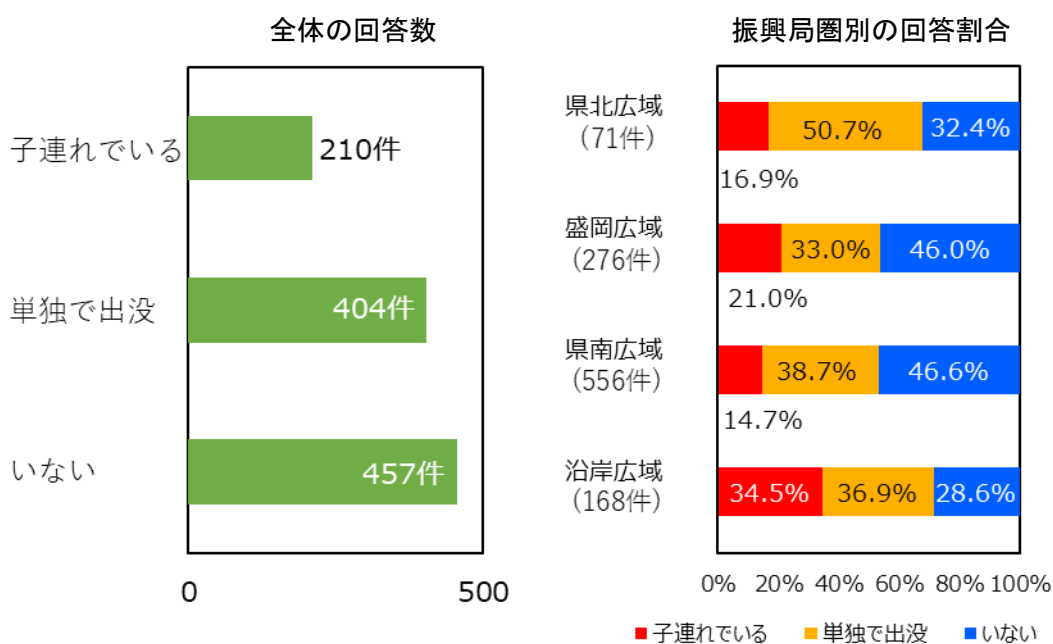


図 5-2 ツキノワグマの生息状況の回答件数

ツキノワグマの生息状況についての回答（回答数 1,071 件）を図 5-1、図 5-2 に示す。回答は、「子連れでいる」、「単独で出沒」、「いない」の3段階とした。

県全体では「いない」の回答が多く（42.7%）、次いで「単独で出沒」（37.7%）の順になっている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別に見ると、沿岸広域圏では「子連れでいる」の割合が他の圏域より高くなっている（34.5%）。

(2) 出没の増減

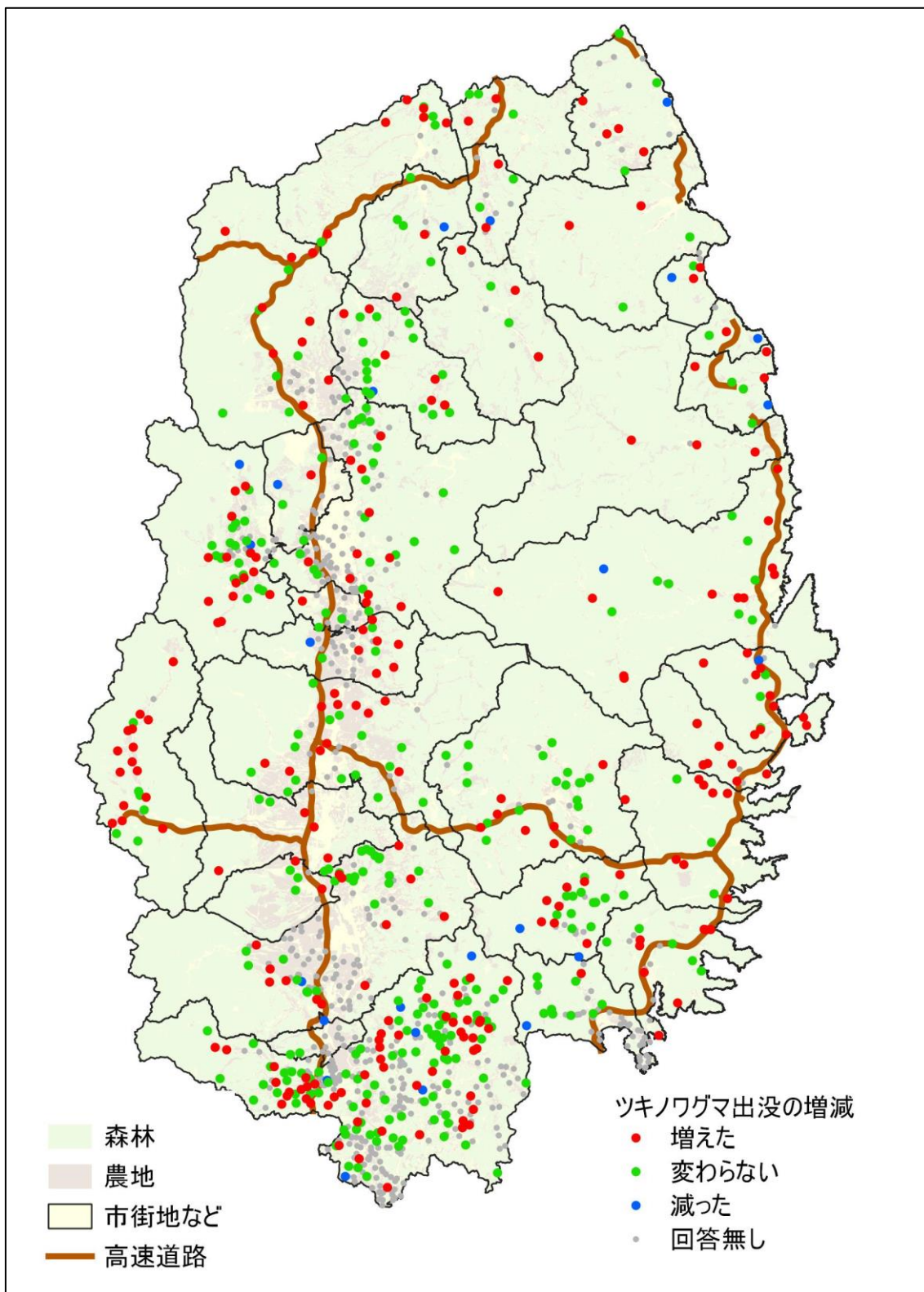


図 5-3 ツキノワグマの頭数の増減

全体の回答数

回答件数：593件（651件）

回答	件数	割合
増えた	248件（255件）	41.8%（39.2%）
変わらない	319件（370件）	53.8%（56.8%）
減った	26件（26件）	4.4%（4.0%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

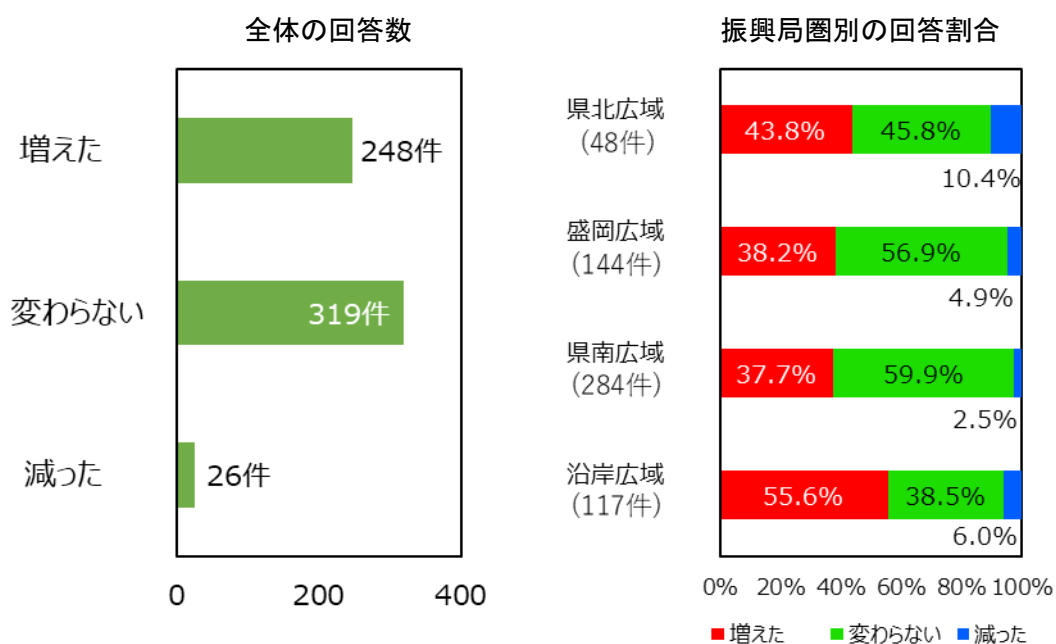


図 5-4 ツキノワグマの出没の増減の回答件数

前年度と比較したツキノワグマの出没の増減についての回答（回答数 593 件）を図 5-3、図 5-4 に示す。

回答は、「増えた」、「変わらない」、「減った」の3段階とした。

県全体では頭数が「変わらない」との回答が最も多く（53.8%）、次いで「増えた」（41.8%）の順となった。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別に見ると、沿岸広域圏で「増えた」の割合が最も高かった（55.6%）。

※「(2)出没の増減」以降の調査は「(1)生息状況」の回答項目で「いない」以外の回答を対象として集計したものである。

(3) 農業被害の程度

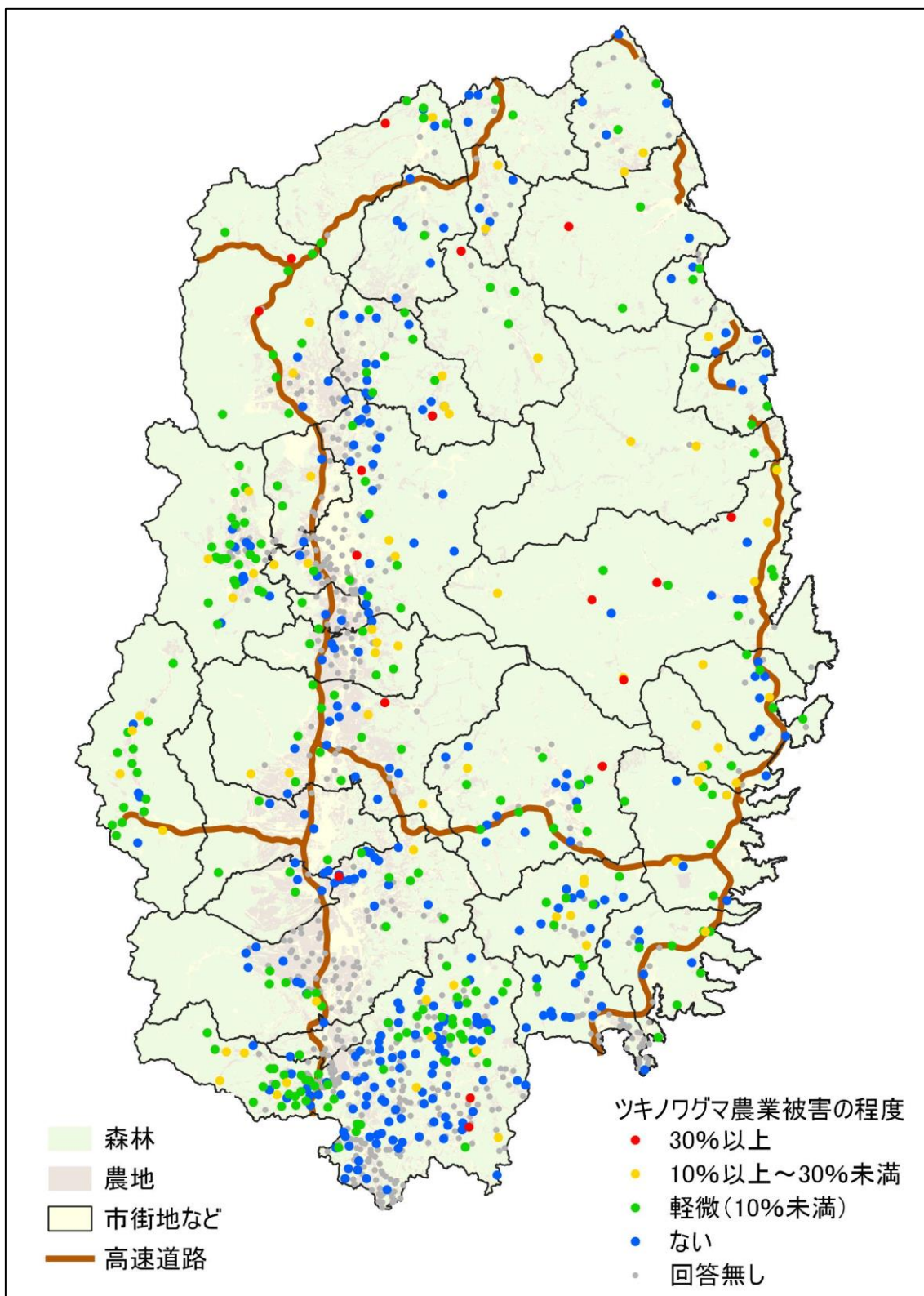


図 5-5 ツキノワグマによる農業被害の程度

全体の回答数

回答件数：602件（644件）

回答	件数	割合
30%以上	17件（17件）	2.8%（2.6%）
10%以上～30%未満	74件（74件）	12.3%（11.5%）
軽微	217件（217件）	36.0%（33.7%）
ない	294件（336件）	48.8%（52.2%）

表の括弧内の数字は令和元年度調査結果を示す。

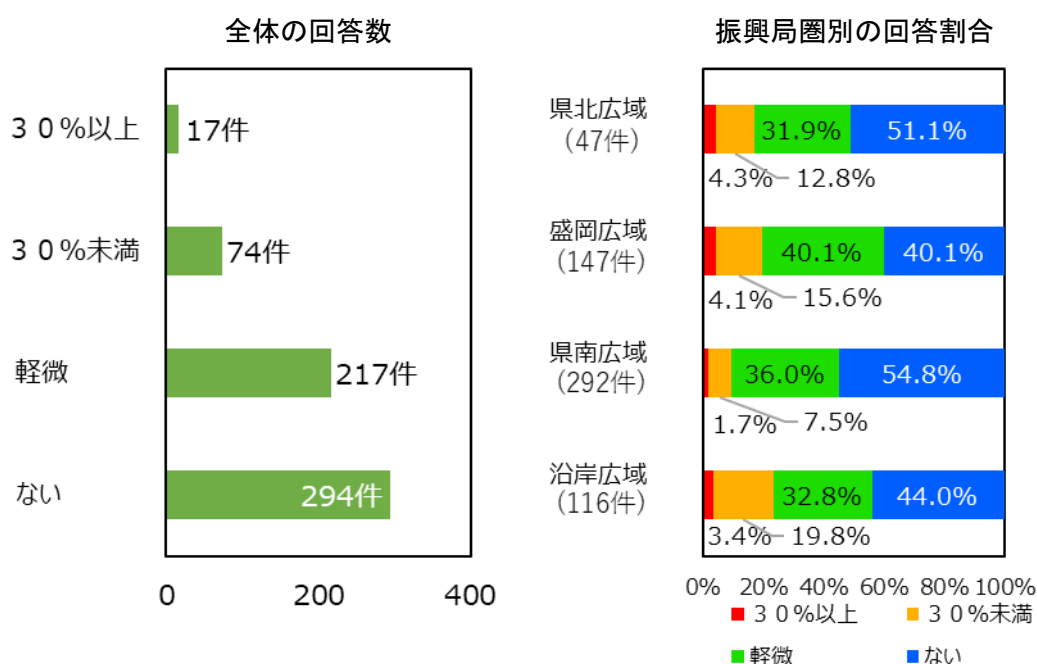


図 5-6 ツキノワグマによる農業被害の程度の回答件数

ツキノワグマの農業被害の程度についての回答（回答数 602 件）を図 5-5、図 5-6 に示す。

回答は農作物の本来の生産量を 100%として「30%以上」、「10%以上～30%未満」、「軽微（10%未満）」、「ない」の4段階とした。

県全体では被害の程度について「なし」の回答が多く（48.8%）、次いで「軽微」（36.0%）の順となっている。

令和元年度調査結果と比較すると、全体の回答の割合に大きな変化はなかった。

圏域別の被害の程度について「30%以上」と「10%以上～30%未満」の回答を合わせた割合は沿岸広域圏が最も高い（23.2%）。

(4) 取り組んでいる防除対策と効果

取り組んでいる防除対策とその効果について図 5-7 に示す。複数の組み合わせで行っている場合も合わせて集計した。

単独の防除対策は「防護柵」(129 件) との回答が最も多く、次いで「捕獲」(97 件)、「やぶ刈払い」(67 件) の順となっている。

対策の効果については「防護柵」を「効果あり」とした回答の割合が 58% と最も高く、次いで「捕獲」(55%) となっている。

複数の防除対策の組み合わせとしては、「防護柵+捕獲」(47 件) が多く行われており、「効果あり」の割合が最も高い。

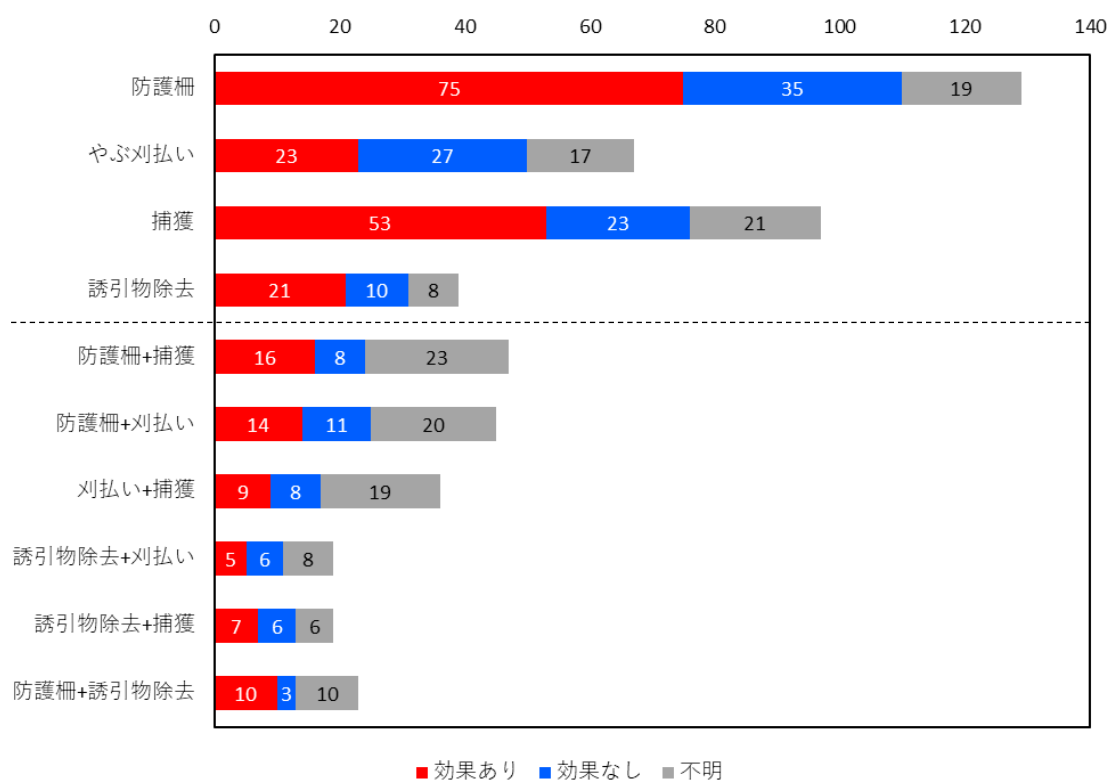
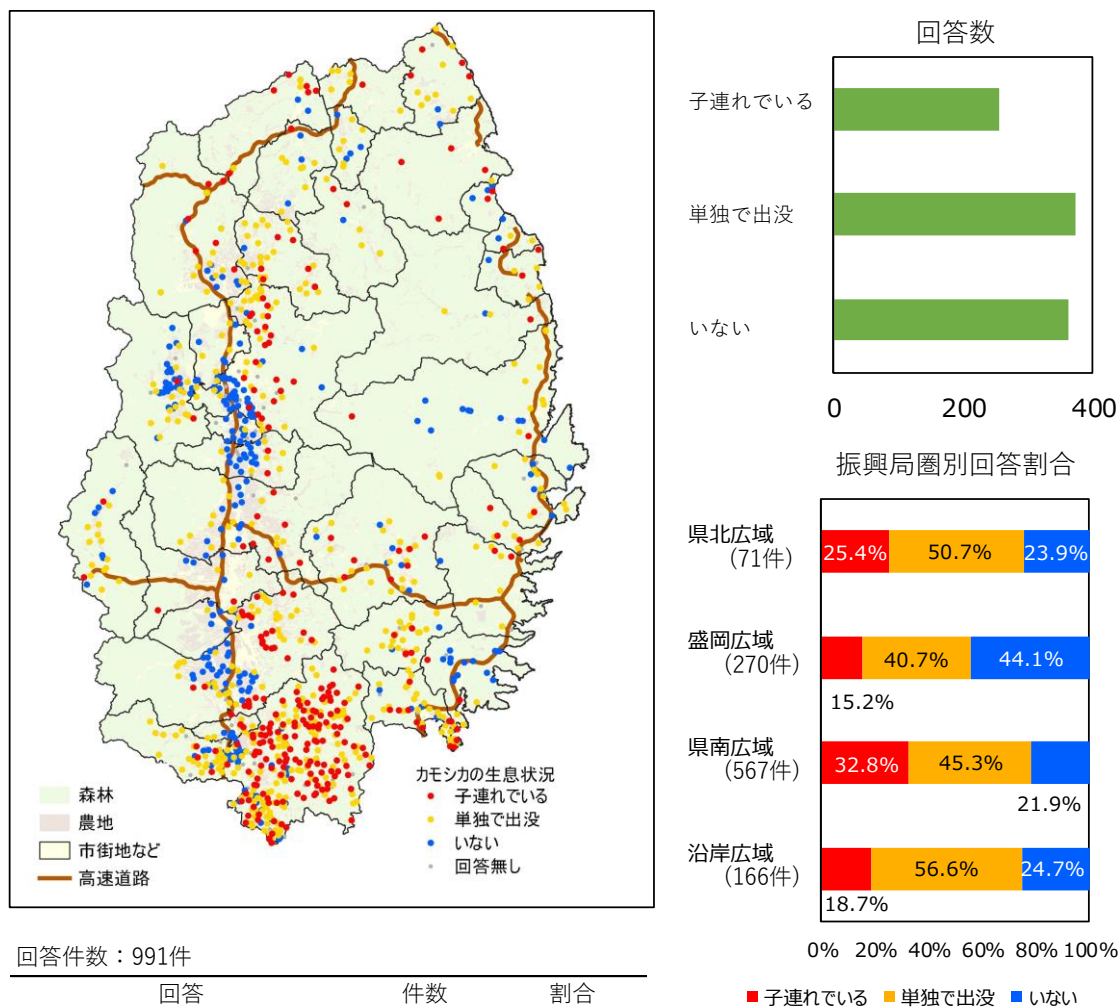


図 5-7 実施している防除対策とその効果

6. カモシカについて

(1) 生息状況



回答件数：991件

回答	件数	割合
子連れでいる	256件	25.8%
単独で出沒	372件	37.5%
いない	363件	36.6%

図 6-1 カモシカの生息状況

カモシカの生息状況についての回答（回答数 991 件）を図 6-1 に示す。

回答は、「子連れでいる」、「単独で出沒」、「いない」の 3 段階とした。

県全体では「単独で出沒」の回答が多く（37.5%）、次いで「いない」（36.6%）の順になっている。

圏域別に見ると、県南広域圏では「子連れでいる」の割合が他の圏域より高くなっている（32.8%）。

(2) 出没の増減

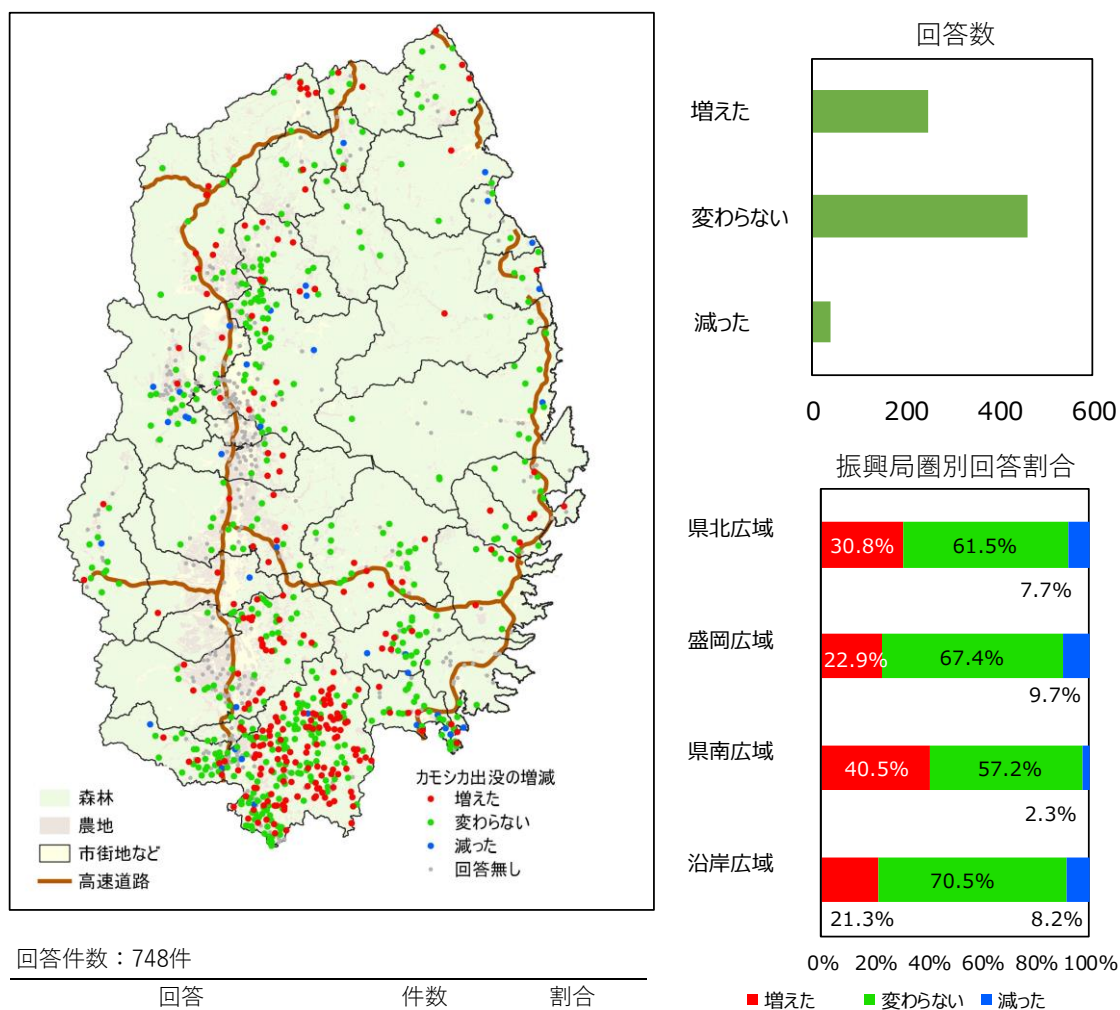


図 6-2 カモシカの出没の増減

前年度と比較したカモシカの出没の増減についての回答（回答数 748 件）を図 6-2 に示す。

回答は、「増えた」、「変わらない」、「減った」の3段階とした。

県全体では頭数が「変わらない」との回答が最も多く（61.6%）、次いで「増えた」（33.3%）の順となった。

圏域別に見ると、県南広域圏で「増えた」の割合が最も高かった（40.5%）。

※「(2)出没の増減」以降の調査は「(1)生息状況」の回答項目で「いない」以外の回答を対象として集計したものである。

(3) 農業被害

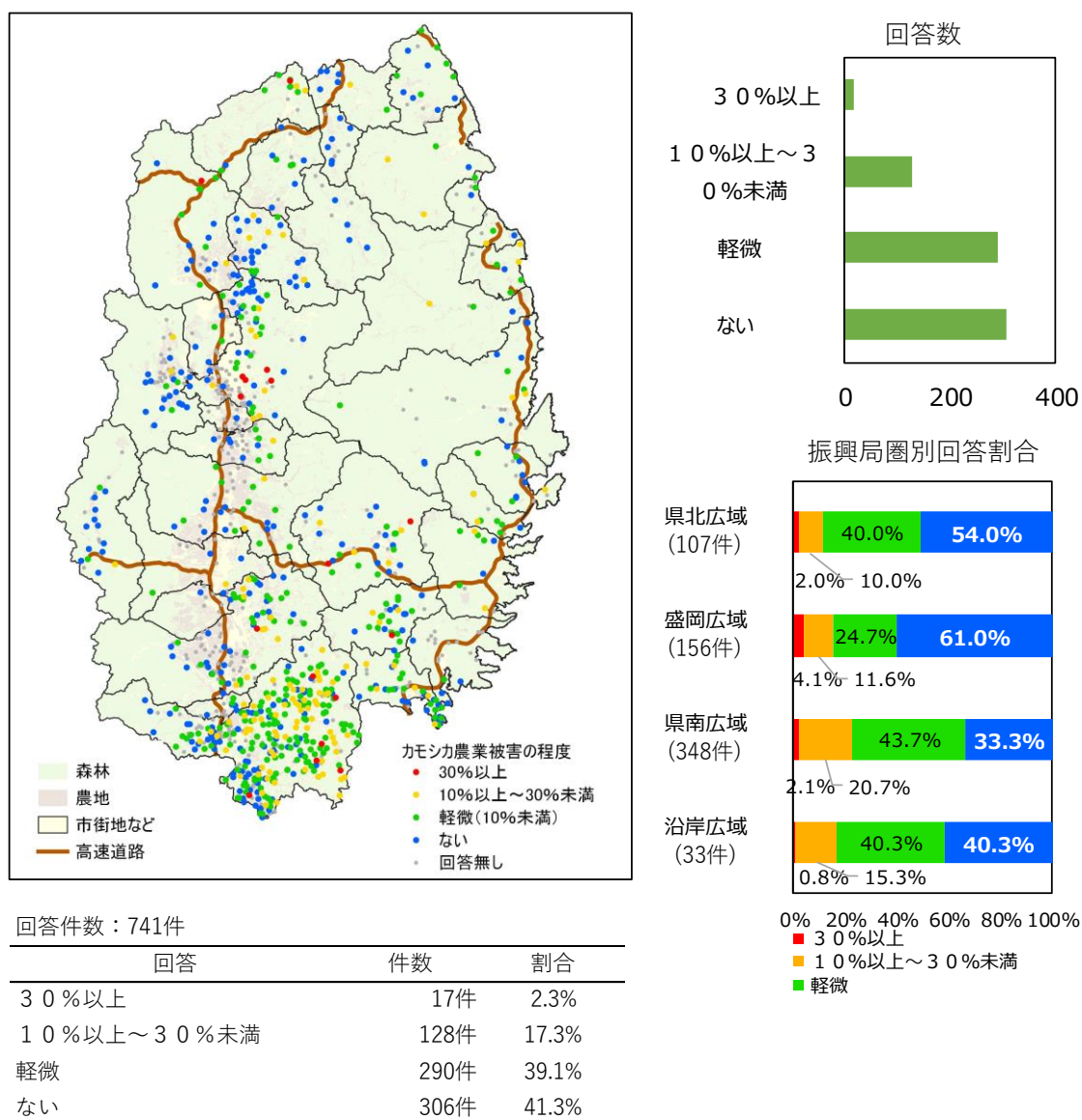


図 6-3 カモシカによる農業被害の程度

カモシカの農業被害の程度についての回答（回答数 741 件）を図 6-3 に示す。

回答は農作物の本来の生産量を 100%として「30%以上」、「10%以上～30%未満」、「軽微（10%未満）」、「ない」の4段階とした。

県全体では被害の程度について「ない」の回答が多く（41.3%）、次いで「軽微」（39.1%）の順となっている。

圏域別の被害の程度について「30%以上」と「10%以上～30%未満」の回答を合わせた割合は県南広域圏が最も高く、22.8%だった。

(4) 取り組んでいる防除対策と効果

取り組んでいる防除対策とその効果について図 6-4 に示す。複数の組み合わせで行っている場合も合わせて集計した。

単独の防除対策は「防護柵」(186 件) との回答が最も多く、次いで「やぶ刈払い」(87 件)、の順となっている。

対策の効果については「防護柵」を「効果あり」とした回答の割合が 65% と最も高く、次いで「誘引物除去」(22%) となっている。

複数の防除対策の組み合わせとしては、「防護柵+刈払い」(50 件) が多く行われている。

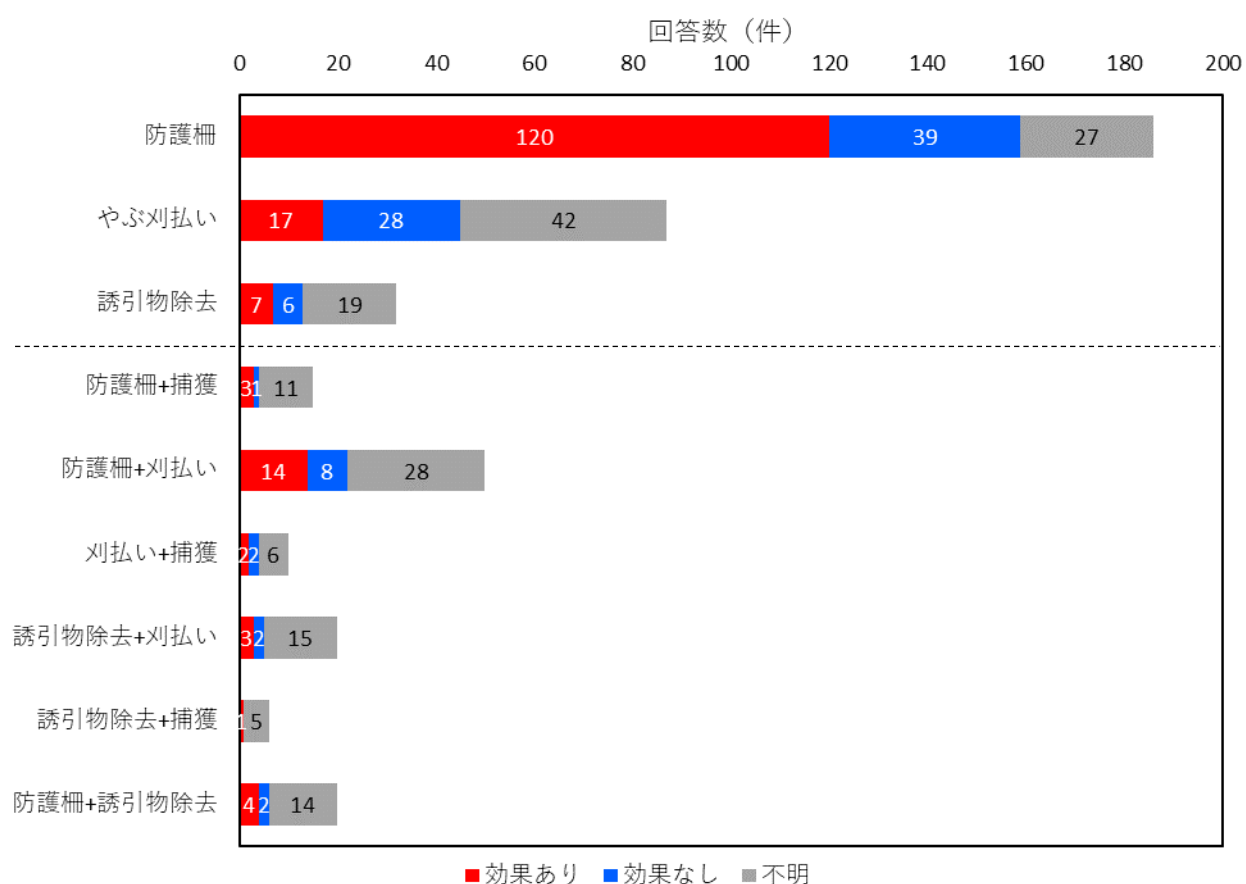


図 6-4 実施している防除対策とその効果